

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：34302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：25370663

研究課題名(和文) 英語対話教材開発のためのマルチモーダルデータベースの構築とその利用

研究課題名(英文) Constructing and using a multimodal database for developing English conversation textbooks

研究代表者

谷村 緑 (Tanimura, Midori)

京都外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：00434647

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：(1)異文化接触場面に焦点をおき、英語母語話者と英語学習者によるマルチモーダル課題達成対話(10組)を構築した。(2)認知言語学的視点から、グラウンディング(相手をお互いに理解する過程)に注目して、英語母語話者と英語学習者の情報の提示方法の違いを明らかにした。(3)ジェスチャーの同期傾向について取り上げ、話し手が聞き手に志向して、調整をしながら課題を進めていることを明らかにした。(4)会話分析的視点から、課題達成対話における中断や断絶からの修復に関して、その特徴を示した。

研究成果の概要(英文)：(1)This research project focused on intercultural contact situations, and constructed multi-modal task based dialogues by 10 pairs of English native speakers and English learners (about 10 hours). (2) From the viewpoint of cognitive linguistics, we focused on grounding (the process of understanding each other), and clarified differences in ways of presenting information between English native speakers and English learners.(3) We discussed synchronized gestures, and clarified that the speaker was very much conscious of the listener, and was trying to establish mutual understanding while making adjustments. (4) From a conversational analysis point of view, the research presented characteristics of interruption and repairs from discontinuation in this task-based dialogue.

研究分野：コミュニケーション学

キーワード：グラウンディング(基盤化) 対話の修復 ジェスチャー 非対称 異文化場面 英語学習者 課題遂行対話

1. 研究開始当初の背景

異文化接触場面とは、言語と文化を異にする個人と個人がコミュニケーションを行う場面をいう(尾崎 1998)。ESL(第二言語としての英語)の研究においては、相当の蓄積のあるテーマだが、EFL(外国語としての英語)の場面ではデータ収集が容易でないため、会話分析的、言語学的に、明らかになっている事実はまだ少ない。

2. 研究の目的

(1) 異文化接触場面に焦点を置き、英語母語話者と英語学習者のペアによる課題遂行対話を構築する。

(2) 対話に関わる様々な視点から、言語的に熟達している英語母語話者と学習過程にある英語学習者(つまり、非対称の関係にあるペア)が、課題を円滑に遂行するために修復、割り込み、調整などを通して、どのように対話を進めるかを明らかにする。

(3) 対話を円滑に行う意図が対話参与者らにない場合、もしくは、協調的に対話を進める意図が対話参与者らにない場合に、対話がどのように展開するのかを、ターン・テイキング、視線、語彙の選択から明らかにする。

3. 研究の方法

(1) コミュニケーションを円滑に進めるために、どのように対話の参与者らが共通の理解に達し、グラウンディングを成立させるかに注目する(例:対話中断の原因特定方略、調整行為など)。

(2) コミュニケーションを支える一つの手段として使用されるジェスチャーの役割について観察する。

(3) 協調的な対話でない場合の、ターン・テイキング、沈黙、オーバーラップなどから観察される対話の構造に注目する。

これらの前準備として、異文化接触場面における課題遂行対話の収録、収録データの文字化を行い、課題遂行対話コーパスを構築した。調査対象者は、英語母語話者と英語学習者のペア10組である。英語母語話者は大学の英語教員、英語学習者は英語を専攻とする大学生(中級:TOEIC 600点前後、上級:TOEIC 900点前後)で、各ペアは顔見知りである。タスクには、ブロックを積む「レゴタスク」(Clark & Krych 2004)を課した。

図1 課題写真例



この課題は、英語母語話者による写真の説明に従って、英語学習者がレゴブロックを積むというものである。収録時間は合計で約10時間である。これらの収録データを、

ShegloffのTRANSCRIPTION MODULE

(<http://www.sscnet.ucla.edu/soc/faculty/schegloff/TranscriptionProject/index.html>)を参考に、文字化した。その後、上記の目的に応じた分析をグラウンディングの観点から行った。

4. 研究成果

協調的な対話の場合:

(1) 対話が中断する原因

1. 英語学習者が聞き間違える(青のブロックと英語母語話者が言っているのに、赤のブロックを手にする)。
2. 英語学習者が単語の意味を知らない (vertical, horizontal, perpendicular)。
3. 英語母語話者の説明が間違っている(色を間違えて伝える)。
4. 英語母語話者の情報提供が不十分である(英語母語話者が右か左か言わず、英語学習者も聞き返さない)。
5. 英語学習者がブロックの置き方を間違えていて、物理的にブロックを置く場所がない。
6. 英語学習者も英語母語話者も出来ていると思っていたら、確認作業で、偶然、お互いに間違いに気づく。

(2) 対話中断の原因特定の方略とその表現方法

1. 英語母語話者と英語学習者が、お互いの状況を説明して、差異を見つけ出し、その部分を回復する。
2. 原因の特定ができない場合、最初からやり直す(okay, I'll start over, yeah?)
3. 英語母語話者が、明示的になにが問題なのかを尋ねる(What was your question?)
4. 英語学習者に誤りに気付かせるために、英語母語話者は英語学習者の認識を変化させるためのやり取りを開始する(No, noのような明示的な発話やYou know, yes butなどの配慮を伴った丁寧な言葉使いで、説明を開始する)。

(3) 調整行為

1. 英語母語話者は、oh, sorry, などの言葉とともにすぐに対話の修復を開始する。
2. 英語学習者は、自分の分かる表現でしか説明できないので、その英語学習者の言語使用が英語母語話者に調整を促す(英語母語話者が英語学習者に合わせていくという形で調整がおこなわれる)(例:右・左の代わりに、ドア側、窓側、縦・横の代わりに南北・東西)。

では、具体的にどのような発話行動がなされ

たのであろうか。以下の例1で、上記の対話の中断、対話の中断の特定、調整行為を確認したい。以下は、絶対的な方向を示す「ドア」と「窓」という単語を使って英語学習者と英語母語話者が青色のブロックを置く位置を確認している場面である。なお、NES は英語母語話者、JEL は英語学習者を示す。

(例1) [ブロックを置く位置 (右か左か) に関して]

64 NES: And back hole is covered with the blue one on the right? ← トラブル源
 65 JEL: Yeah.
 66 NES: Red on the left. ← トラブル源
 67 JEL: Yeah, sorry, sorry, my side...blue is...in my...my right? ← 聞き返し
 68 NES: Yeah, yeah
 69 JEL: Your...in your
 70 NES: She blue is on the right but it's your end of the yellow one
 71 JEL: Blue is ← 聞き返し
 72 NES: Covered two holes
 73 JEL: Window? ← 聞き返し
 74 NES: Door
 75 JEL: Door?
 76 NES: Yeah, the blue one is on the door side
 77 JEL: And red is window side
 78 NES: Yeah
 79 JEL: Ok, ok

発話番号 67 で英語学習者は自分から見て右なのか、母語話者から見て右なのかを確認しようとしている。しかし、英語母語話者が自分の説明に問題があったことに気づいていないため、70 ではどちら側の右かを明示することはなく、代わりに別の情報を加えている。さらに、71 では英語学習者の言い差しを英語母語話者が引き取り、英語学習者が求めているのとは異なる情報を追加している。ところが、73 Window?で、英語学習者が相対的な指標ではなく絶対的な指標による調整を行うと、この調整が英語母語話者の発話の変更(75 の Door)を促している。ここで重要なことは、73 の window という聞き返しによって、なにが問題であったのかが英語母語話者に理解されたという点である。つまりここで、問題が特定される。そして、74 から調整行為が始まり、79 の受諾で対話の修復が完了する。まとめると、グラウンディングの成立までの過程は、欠けている情報がなにであるかを共有するための探索を通じた、問題特定のための試行(73 まで)と、問題の解決を示す 74 の door, そして英語学習者の受諾(79 Ok, ok)で構成されていることが分かる。

(4) ジェスチャーの同期

1. 英語学習者は、言語よりも非言語情報を有効活用し、作業に利用しているだけで

なく、更に相手のジェスチャーをまねることによって、自分の理解を強化する(Holler and Wilkin, 2011)。

2. 英語母語話者は英語学習者に対して、より大きい動作を用いる。また、英語学習者も理解していることを示すために、必要以上にジェスチャーを使用する。

以下の例2は、英語母語話者がブロックの向きについて説明している場面である。なお、個人情報保護の観点から、個人が特定されることがないように図は加工した。左側の黒の服装の男性が英語学習者、右側の薄い青色の服装の男性が英語を母語とする教員である。[] は発話の重複、[] はジェスチャーの説明である。

(例2)

4 NES: not long this w[ay],
 5 JEL: [okay]
 [NES points to his left and right side twice.]
 図2 [NES が両手の親指を外に向けて、指さしている場面]



6 NES: long th[is way],
 7 JEL: [this way] okay
 [NES points to himself 3 times]
 [JEL puts his hands together & directs NES]
 8 NES: right? So, it's like a green, yellow, green. Okay?

図3 [NES が両手の親指で自分を指し、JEL が両手を合わせて、NES に向けている場面]



発話番号4でNESは図2にあるように両手の親指を外に向けて、not long this way と発言して、「左右に長くブロックを置かない」ように指示する。次に図3にあるように、NESはlong this way と発言して自身を両親指で指す。この動作に伴い、ほぼ同時にJELが両手を合わせて、NESの方向を指す。ここで重要なのは、発話4、発話6で、指示対象が異なるにもかかわらず、指示詞のthisをNES

が使用していることである。つまり、NES は this で指している方向が、JEL に認識されていると信じていることになる。しかし、JEL は this の指示対象があいまいであるため、言葉だけでなく、ジェスチャーも利用して、ブロックの方向が縦向きであることを NES に示している。このことにより、JEL は this の方向が正しく理解できていることを、ジェスチャーでもって強化している。そして、両者は、互いに積極的に対話に貢献することで、共有理解に達している。このように、協調的な対話では、発話参加者らの積極的な、対話への貢献が観察される。では、協調的でない対話の場合、対話はどのような構造になっているだろうか。

協調的でない対話の場合：

(1) 課題が成功しない原因

1. 英語母語話者は英語学習者から質問が出ないように、ポーズを置かずに話し続ける。
2. 英語学習者は、分からないことがあっても質問しない。
3. 英語母語話者は英語学習者と視線をあわせようとしない。
4. 英語学習者は、相手の発話内容が分かっていなくても、umm hum と相槌を打つため (Brennan 1998, 2014)、英語母語話者は英語学習者が理解をしていると勘違いする。

(2) 対話中断の原因特定の方略とその表現方法

対話中断の原因特定行為として、英語母語話者の確認発話 (okay?) が観察された。しかし、実際にそこから対話の修復がなされることはなかった。

(3) 調整行為

調整行為も確認できなかった。

(4) 修復されない対話の構造

例 3 は、課題が成功しない原因の一つとして挙げられるポーズに関する場面ある。なお、() は沈黙の時間 (秒)、< > はジェスチャーを示す。

(例 3)

34 NES: on top of the blue four pin lego

35 JEL: uh huh

36 NES: put a, red four pin lego (2)

(JEL reached red blocks)

okay and done let's see (23)

(JEL didn't take a red block and brought back his hand to a rest position.)

(JEL moved the blocks to show them to NES. NES checked the completed model for accuracy with silence.)

37 NES: alright

発話 36 で、NES は JEL がまだブロックを置き

終わっていないのにも関わらず、ok done let's see と発言し、一方的に課題終了を宣言している。また、ok と done の間にポーズがないことから、英語母語話者は英語学習者から質問が出ないように、ポーズを置かずに話し続けていることが分かる。つまり、英語学習者の割り込みを許さない構造になっている (Heritage 1997)。課題終了後も、英語母語話者はフィードバックを与えることなく、alright と 37 で発言し、次の課題にうつっていることから、協調的な課題遂行になっていないことがうかがわれる。

例 4 は、上記の 3 (視線をあわせない) の具体例である。

(例 4)

21 NES: now on top of the green four pin,

uh eight pin lego, so the bottom green

lego the train car lego

22 JEL: uh huh

23 NES: put a four pin <one-sided gaze by JET> blue lego

24 JEL: uh huh <small nodding by JET>

25 NES: the same level as the yellow and red

26 JEL: uh huh

27 NES: and there is a narrow gap between

the yellow <one-sided gaze by JET> and

the blue so the red the yellow and the

blue four pins <one-sided gaze by JET>

are all on top <one-sided gaze by JET>

of the blue and green eight pins and

there is a narrow gap between the blue

and the yellow and the red and the

yellow <one-sided gaze by NES>

JEL は NES の発言が理解困難な時に NES に視線を送っていた (発話 23, 24, 27)。しかし、NES は視線をあわせようとはしなかった。結果、JEL は、NES の指示が理解できないまま課題を終了している。これは発話が遮られることを避けるよう、対話がデザインされていたためと考えられる。

以上、協調的な対話と協調的でない対話の分析を行った。協調的な対話の場合、課題は相補的な協調行為によって達成されること、また、英語母語話者は基本的には、英語学習者の認識を志向することで、グラウンディングの成立に向けて調整していることが示された。協調的でない対話の場合、そもそも、グラウンディングを達成することが目的ではなく、課題を終了させることが目的であるため、対話の修復活動は行われないこと、修復に伴うジェスチャーの使用やアイコンタクトなどといった非言語行動の使用頻度の低さも確認された。また、修復されない対話には、沈黙、オーバーラップ、質問一応答など

が、特徴的に使用されており、これら対話を構造化していることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 1 件)

- ① 谷村緑, 吉田悦子 課題達成対話における日本人英語学習者の基盤化形成とジェスチャーの同期. 日本語用論学会大会発表論文集, 査読無 (2017 出版予定)

[学会発表] (計 4 件)

- ② 谷村緑, 吉田悦子, 仲本康一郎, 竹内和弘. 課題遂行対話における相互行為プロセス —英語母語話者と日本人英語学習者はどのようにグラウンディングを成立させるか—. 社会言語科学会. 2015/03/14, 東京女子大学 (東京都杉並区).
- ③ Midori Tanimura, Etusko Yosida, Koichiro Nakamoto, and Kazuhiro Takeuchi. How People Achieve Common Ground in Asymmetrical Setting of Task-based Dialogues: Comparing Pairs of Native English Speakers to Pairs Comprised of a Native English Speaker and a Non-native English Speaker. British Association of Applied Linguistics Annual Meeting. 2015/09/03. Aston University, UK.
- ④ Midori Tanimura, Etusko Yosida, Koichiro Nakamoto, and Kazuhiro Takeuchi Teacher-learner Interaction with Asymmetrical Power and Knowledge: A Case of a Noncooperative Pair. The 26th Annual Conference of the European Second Language Association (EUROSLA). 2016/08/26, University of Jyvaskyla, Finland
- ⑤ 谷村緑, 吉田悦子 課題達成対話における日本人英語学習者の基盤化形成とジェスチャーの同期. 日本語用論学会. 2016/12/10. 下関市立大学 (山口県下関市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷村 緑 (TANIMURA, Midori)
京都外国語大学・外国語学部・准教授
研究者番号: 00434647

(2) 研究分担者

吉田 悦子 (YOSHIDA, Etsuko)
三重大学・人文学部・教授
研究者番号: 00240276

(3) 仲本 康一郎 (NAKAMOTO, Koichiro)

山梨大学・留学生センター・准教授
研究者番号: 80528935

(4) 連携研究者

竹内 和広 (TAKEUCHI, Kazuhiro)
大阪電気通信大学・情報通信工学部・准教授
研究者番号: 20440951